季刊＊九大病院ニュース

KYUSHU UNIVERSITY HOSPITAL NEWS

vol.1 2005.06

特集 九大病院地域医療連携センター

基本理念

患者さんに満足され、医療人も満足する医療の提供ができる病院を目指します。

基本理念に基づく実行目標として、

1）地域医療との連携及び地域医療への貢献の推進
2）プライマリ・ケア診療の充実
3）全人的医療が可能な医療人の養成
4）専門医療の高度化を目指した医学研究の推進
5）国際化の推進

を掲げています。

INDEX／目次

1. ごあいさつ …… P2～3
2. 特集／九大病院地域医療連携センター …… P4～5
3. メディカルセミナー／イベント …… P6～7
4. 九大病院経営分析室レポート …… P8
5. 部門紹介 …… P9
6. コラム …… P10
7. 人事の動き …… P11
8. 九大病院行事案内／編集後記 …… P12

九大病院行事案内

平成17年7月1日～平成17年9月30日

○行事名：第6回福岡市外科臨床研究会
期間：平成17年7月1日（金）18：30～21：00
場所：西鉄グランドホテル
問合せ先：九大病院関連・腫瘍外科、横田
電話：092－642－5447

○行事名：第2回総合医療連携セミナー（第4回九大糖尿病セミナー）
期間：平成17年7月9日（土）
場所：九大医学部百年講堂
問合せ先：九大病院関連腫瘍外科、杉谷教
電話：092－642－5447

○行事名：第86回乳癌・総合外科セミナー
期間：平成17年7月14日（木）
場所：九大病院関連研修センター　コンファレンスルーム
問合せ先：九大病院第二外科講師　藤島義愛
電話：092－642－5504

○行事名：東京大学医科学研究所附属病院　中村祐輔先生ご講演
期間：平成17年7月19日（火）夕方
場所：九大生医研別館
問合せ先：別府市医療センター外科　藤島義　三苫幸士
電話：0977－27－1951

○行事名：第1回　福岡産婦人科研究会
期間：平成17年7月21日（土）
場所：九州大学医学部　百年講堂
問合せ先：九大病院関連外科　藤島義愛
電話：092－642－5447

○行事名：第24回福岡医師の科学生涯講座（土に関する医の先生方の会）
期間：毎月1回　19：00～20：30
場所：九大病院4階・臨床入講室
受講料：1,500円（12回分）
問合せ先：九大病院関連腫瘍外科　生涯講座　小松研究
事務局：http://www.med.kyushu-u.ac.jp/surgon/kouza.html
電話：092－642－5447　FAX：092－642－5479

第4回　平成17年7月21日（木）
■最新の神経性不整脈の診断と治療－薬物療法を中心に
神経内科　樽本昌子先生

第5回　平成17年9月15日（木）
■非弁膜症性心房細動患者の治療をどのようにするか？
呼吸器科　中野孝一先生

第6回　平成17年11月17日（木）
■動脈硬化性疾患の治療－ガイドラインを中心に
心臓外科　富田英先生

○行事名：MMC会「小児期発育障害の原因と治療」
期間：平成17年7月26日（月）
場所：三菱ホール　博多区網場町2－2　福岡第一ビル7F
問合せ先：九大病院関連外科　藤島義愛
電話：092－642－5504

○行事名：第56回行事会
期間：平成17年7月30日（土）
場所：三菱ホール　博多区網場町2－2　福岡第一ビル7F
問合せ先：九大病院第二外科藤島義愛
電話：092－642－5504

○行事名：第4回トランスレーショナルリサーチ研究会
期間：平成17年8月5日（金）13：00～17：00
場所：九州大学医学部　コラボラボレーション館
問合せ先：臨床研究センター　中西豊一
電話：092－642－5376　FAX：092－642－5379

○行事名：MMC会「深部静脈血栓症（エコノミークラス症候群）」
期間：平成17年8月29日（月）
場所：三菱ホール　博多区網場町2－2　福岡第一ビル7F
問合せ先：九大病院関連外科　藤島義愛
電話：092－642－5504

○行事名：福岡国際電子総合病院シンポジウム
期間：平成17年8月31日（土）18時から
場所：九大病院総合研究棟7階ルーム
問合せ先：九大病院第二外科　藤島義　吉良
電話：092－642－5401

○行事名：市民公開講座
テーマ：子どもの病気の予防とケア
期間：平成17年9月4日（日）14時から
場所：九大医学部百年講堂ホール
問合せ先：九大病院総合研究棟　池田
電話：092－642－5401

○行事名：MMC会「筋萎縮性疾患系の病態と治療」
期間：平成17年9月29日（月）
場所：三菱ホール　博多区網場町2－2　福岡第一ビル7F
問合せ先：九大病院関連外科　藤島義愛
電話：092－642－5504

○行事名：福岡の消化器手術フォーラム
期間：平成17年9月30日（金）18：00～21：00
場所：ソラリア西鉄ホテル　「月桂」
問合せ先：kimura@med.kyushu-u.ac.jp　平田敦　秋吉・樋口・三島
電話：092－642－5750

九大病院散歩

大森通り

昭和41年に医学部構内の主要道路に医学部に功績のあった教授の名前を付けることとなり、正門から入って総合外来に向かうメインストリートは、大森治豊教授（外科学）に因み「大森通り」と名付けられました。

大森教授は明治12年に福岡医科大学の前身である福岡県立福岡医学校の設立時に外科教師として赴任され、外科学分野において優れた業績を挙げられました。その業績は帝王切開手術をはじめとする教師の手術例「心臓切開一百例」としてまとめられ、その評価により、明治28年8月に帝国評議会の推薦を受け、医学博士の学位を得ておられます。同教授は明治21年に新しく誕生した県立福岡病院の院長兼外科部長に就任され、また明治36年には福岡医科大学創立時の初代学長兼附属病院長に就任されるなど、九大病院の創設、発展に最大の功績を残されました。

創立75周年記念事業の一環として造成された記念庭園の一角に同学長の銅像が設置されており、今でも九大病院の発展を見守っておられます。

編集後記

九大病院初の医療機関向け広報誌をお届けします。4月22日開催の今年度第1回の広報委員会で医療機関向けの広報誌を作ることが決まりました。素人の無謀さで、6月26日の九大病院関連病院長会議に合わせて創刊号を出すことにしました。以来、わずか2ヶ月の準備期間は、あっという間に過ぎ去りました。予定通りに発刊できましたのは、忙しいなか厳しい締め切り期限を守って本創刊号に記事をお寄せくださった皆さんのおかげです。この場を借りて深謝申し上げます。大学院大学らしい学術的な雰囲気を保ちつつ、九州の病院らしい温かみのある紙面作りをめざしました。このため表紙は緑とオレンジを基本的な色調として採用しました。裏の写真は、プロ並みの腕をもつ事務部の田中慶率課長補佐、最終ページの九大病院散歩は歯科の平松直子先生の手になるものです。これから毎号、九大病院内の風物や歴史的な記念物を写真でお届けします。ご期待ください。

九大病院広報部長　吉良潤一

表紙説明：1期棟全容を現す（平成18年4月1日オープン予定）目次のインデックスは九大病院に立つ彫刻「神の手」

九大病院ホームページ：http://www.med.kyushu-u.ac.jp/hosp/

企画・発行／九州大学病院広報委員会
福岡県福岡市東区馬出3-1-1　TEL.092-641-1151(代)

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

平成17年6月発行

ごあいさつ
Greeting

九大病院長

水田祥代 病院長

九大病院ニュース発刊に当たって

私の描く九州大学病院は、患者さんやそのご家族のみならず私たち医療を提供する側の医療人も納得し、満足する医療を提供することです。これは単に専門性の高い高度先進医療の提供によって病気が治ることだけではありません。中にはどんなに頑張っても現在の医療では治らない・治せない病気もあります。私たちが全力をつくして、そのうえでたとえ治せなかった場合も、患者さんやそのご家族の方々が診療のプロセスを納得し、その結果を受け入れてもらえるような医療を提供し、同時に、私たち医療人も全力を尽くした自分で納得でき、後悔しない医療を提供することです。

平成16年度は法人化という新しい体制の下、試行錯誤の年、体験から学ぶ年でもありましたが、皆さんのご協力を得て、この1年間、従来からの大学病院の使命である診療、教育、研究に加え、法人化後の新たな使命となった健全な経営へ向けての努力も行いながら、いよいよキックオフの17年度となりました。

17年度は診療面においては、10月には北病棟が竣工し、18年4月からの開院に向けての準備が開始されます。歯科センターも含めた全病棟が新病院へ移転することにより、本当の意味での統合が完了し、その成果が明確されております。また、九州全域やアジアを見据えた地域医療との連携の促進を図るべく、地域医療連携センターも活動を開始しております。教育面においては、新臨床研修制度も2年目を迎え、研修プログラムの見直しや、九大病院での研修のウィークポイントといわれておりました救急部の充実を図り、4月からは指導体制を確立し、一致団結していかなる領域の救急にも対応できる体制になっています。また、来年から始まる3年目以降の専門研修についてはこれからの専門研修が若い医師達のキャリアパスになるようなプログラム作りや、ポストの確保に努力しております。さらに臨床研修センター専属の教官（助教授、助手）ポストもこの4月より設置されており、充実した初期臨床研修および専門研修ができるように病院を挙げて取り組んでいます。研究面では、九州大学病院臨床研究センターの実績も順調に伸びており、またこの8月には第4回TR（translational research）懇話会を当院でお世話することになっています。昨年12月にオープンした内視鏡外科トレーニングセンターでは、学内のみならず学外からの実習希望者も多く、またNEDOの支援で設置された研究用open MRIも稼働を開始し、先端医療の普及へ向けて成果を上げております。

時代が変わり、組織が変わっていく中で、大切なことはみんなの意識改革であり、情報の共有であると思います。九大病院の職員のみならず、関連医療機関や、市民の皆さんへ情報を提供し、また情報を提供していただきながら、九州大学病院の現状を理解していただくために、17年度は広報活動に力を入れることも1つの目標としております。ご支援・ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

九大病院別府先進医療センター

牧野直樹 副病院長

（別府地区）

先端医療からケア型医療までをめざして

九州大学病院別府先進医療センターは九州大学の三病院の統合に伴い、平成15年10月に九州大学病院の別府地区の医療センターとして再出発しました。現在、難治性疾患であるリウマチ膠原病、がん、生活習慣病を中心として、質の高い医療を提供できるように努力をしています。また、多様化する医療の中で医学研究の成果を臨床医学に応用する先進医療の開発にも取り組んでいます。一方では生命・生活の向上を目指した全人的な医療を展開し、社会の新しいニーズに応えたいと考えております。

当院は、昭和8年別府市に心臓の田原結節を発見した田原淳先生を初代所長として九州大学温泉治療学研究所の診療部門として発足し、以来70余年の歴史を持ちます。昭和39年に温泉治療学研究所附属病院として設置されました。昭和57年に生体防御医学研究所附属病院と改組され、研究所が掲げる生体防御に関する学理およびその応用研究という目的に沿って、基礎から臨床への一貫した研究診療体制をとってきました。平成15年10月より、九州大学医学部附属病院、歯学部附属病院、生体防御医学研究所附属病院が統合され九州大学病院となりました。別府地区では九州大学病院別府先進医療センターとして、地域や時代のニーズに対応できる新しい型の病院を目指して再出発しました。診療科を統合再編し、遺伝子治療などの最先端医療（先端分子・細胞治療科）は福岡地区で行い、別府地区では先端的研究と優れた環境と著名な伝統と実績を踏まえ、免疫・生活習慣病内科、がん治療科を設置し、患者さんに優しく、侵襲副作用の少ない先進的医療を目指しています。内科診療では、リウマチ膠原病、血液、代謝性疾患、循環器、呼吸器、老人性疾患を中心として、外科診療では、消化器がん、乳がん、一般外科を行い、従来にもまして質の高い医療を提供しています。また、細胞・免疫療法や造血幹細胞移植などの新しい治療法の導入もいたしております。一方、本センターでは歴史的に温泉療法を行ってきた経緯があります。慢性疾患診療科では残存した身体機能を保持し、社会復帰をはかることを主眼にしたリハビリテーション診療も行っています。これは病的状態からの自律的回復や機能調整の改善が主体であり、病的状態の人を可能な限り正常化へ持って行くという健康増進型の医療でもあります。

別府先進医療センターは多様化する医療の中で、医学の研究成果を臨床医学に応用する先進医療の開発もまた重要な使命の一つであります。まるわち、当センターは高度先端医療からケア型医療への調和のある医療を展開し、社会のニーズに応えたいと考えています。皆様方の一層のご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

九大病院歯科医療センター

吉谷野　潔 副病院長

（総括・歯科担当）

九大病院歯科部門を有効活用しましょう

先生方が普段診ておられる患者さんについて、歯科のことで気になったことはありませんか？　歯科あるいは顎口腔の問題があれば、九大病院歯科部門にご紹介ください。「何科に紹介するの？」、「誰宛に紹介すればよいの？」そんなことは気にせずに、宛名は「九大病院歯科」で結構です。歯科部門のベテラン歯科医師が、患者さんの症状を診て受診すべき診療科を振り分ける体制をとっています。または、「九州大学病院地域医療センター」への電話（092－642－5185）やFAX（092－642－5155）でも結構です。

歯科部門では、13専門診療科2中央診療部と14の連携診療部門を持ち、各々に専門家を揃えていますので、歯科および口腔外科に関することなら何でも対応可能です。診療内容は、う蝕や歯周病の治療、義歯、歯科矯正治療から顎骨骨折などの外傷、顎変形症や口腔癌悪性腫瘍まで幅広い疾患に対応しています。

小さな初期う蝕に対象外などということもなく、歯ブラシ指導や歯石除去などの予防も行います。また、顎関節症外来、インプラント外来、口臭外来、ホワイトニング外来、顎補綴外来（腫瘍切除後の顎義歯によるリハビリテーション）等も設置しています。血性感染から重篤な腫瘍症や麻痺疾患などの対処も行っています。院内では医科の各科と連携して治療に当たりますので、基礎疾患がある患者さんでもきちんと対応できます。医科と連携して、口腔乾燥症の治療や唾液・嚥下訓練も行っています。また、睡眠時無呼吸症候群に対する口腔内アプライアンスによる治療も行っています。

入院患者さんに対する疾患に応じた専門的口腔ケアも行っています。内容は①患者や介助者への口腔衛生指導、②義歯の調整、清掃、管理指導、③口腔機能のリハビリテーション、④口腔粘膜疾患の処置、⑤唾液病、慢性関節リウマチなどの易感染性の患者さんや循環器疾患のリハビリなどが含まれます。さらには、外科手術を控えた患者さんには、術後性肺炎の予防を目的として、術前の口腔内の清掃や歯科的感染源の除去を行います。勿論、心臓手術前には歯科治療が必須であることは御存知のことと思います。

虫歯などの歯科治療が必要だけれど、入院して管理しないと容体が安定しない、そんな患者さんでも大丈夫です。歯科部門だけでも対応しますが、必要があれば、医科の各科と連携して全身管理と歯科治療の両面から対応します。抗凝固剤服用を含めた心疾患の患者さん等々、どうぞ御連絡下さい。

歯科部門では、このようにおよそ歯科に関することなら何でも対応できます。先生方の患者さんで、歯や口に関して気になることがあったらどうぞ気軽に「九大病院歯科部門」をご利用ください。セカンドオピニオンでも結構です。

九大病院看護部

尾首睦美 看護部長

共通理念のもとにめざす看護

九州大学病院看護部は福岡地区および別府地区を含んで、看護職員約870名（看護助手共）を擁す職集団です。看護部紹介の冒頭に理念作成の経緯からご紹介させていただきます。この集団が一つの方向（目標）に進路を設じるためには常に共通理念を必要とします。看護部では、この理念作成にあたり平成13年、看護職員全員に対しどのような看護をめざし、提供するかという内容でアンケートを取りました。膨大な内容からキーワードを抽出し以下の理念の作成に至りました。

看護部理念
- 人間性を尊重し、まごころをもって安心で安全な看護を提供します。
- 大学病院の使命を認識し専門職として研鑽に努め、責任ある看護を提供します。
- 地域との連携をはかり、継続性のある看護をもって地域医療に貢献します。

ここにいう人間性とは、どのような、誰の人間性なのか、についてかなりディスカッションをいたしました。結論として、この語の所有者は患者さんを含む医療やそれに関わる仕事に従事するものすべての人々であると言う結意を得ました。人間性を尊重することの大切さを共に感じあいましょう。そうすればいいコミュニケーションのもと、おのずからいい看護が提供できるでしょうという意味を込ませたからです。皆で考え作成したこの理念は日常の看護を行う上での指針となっています。

さて、当看護部は年間70～90名の看護師が入れ替わります。平均入職時1桁台の入れ替えで、平均年齢は約32歳。民間からすれば少々高齢かもしれませんが、組織の成熟度や、活性化への視点からはほぼ理想ではないかと思っています。

近年看護系大学や、一般大学の卒業者も増えてきました。専修学校卒業者を含めて臨床経験の少なさをカバーするために、当院では特に新人教育、現任教育に力を入れております。また、昔から看護一筋、キャリアを積み重ねてきた実践者も多くいます。彼女らの経験知は、専門職としての誇りと看護観をもって本院の土台を支えています。患者さんはじめ他職種からの信頼を担っている中心的存在でもあります。入院患者さんの70%が看護度B（1～2時間毎の観察度）という重症者が多いのも大学病院の特徴です。先進医療を遂行する現場では看護力の質向上は欠かせません。看護職員が日々携んだ医療現場で達成感への喜びを味わえるよう職場環境を整えていくことも管理者の大きな使命と感じております。

昨年から地域医療連携室の充実がなされ、センターとしてその機能をおおいに発揮しております。他職種の方々と協力のもと、紹介患者さんの受け入れや退院・在宅支援等地域関連の方々との連携を深め、ますます看護の力を発揮してまいりたいと思っています。

今後とも、患者さんのご紹介をよろしくお願いいたします。

九大病院地域医療連携センターの発足

地域医療連携センター長 吉良潤一

高度先進医療と地域医療の橋渡しをめざして

九大病院地域医療連携センターが平成17年4月1日に発足しました。これは、平成15年に恒元浩一教授を初代室長として発足した地域医療連携室の業務の拡大に伴い、マンパワーを充実させセンター化したものです。当センターの役割は、地域格差なく誰でも最先端の医療の恩恵に浴することができるよう、高度先進医療を担う九大病院と地域医療機関との橋渡しをすることです。九大病院で高度先進医療を受けられた患者様を、開業医や一般病院との密接な連携により居住の地域に円滑におかえしすることをめざしています。この目的の実践のため、当センターには、入院支援を行う前方支援部門、退院支援を行う後方支援部門、さらにアジア諸国との医療連携を図るアジア国際医療連携室を設けています。当センターでは9人の専任職員（看護師3人、社会福祉士2人、事務職員4人）と10人の兼任職員（医師1人、臨床検査技師1人）がスタッフとして活動しています。今年度から医療連携コーディネーター（Medical Network Coordinator：MNC）を置け、現在3人（看護師長、専門職員各1人）がMNCに任命され、院内、院外の医療連携の責任者となっています。昨年10月より患者様相談室を設置、社会福祉士の資格を有するMedical Social Worker（MSW）が専任で各種の医療相談にあたっています。また昨年12月には在宅療養支援室を設け、専任の看護師3人が在宅療養指導業務に携わり、きめ細かい在宅療養支援を行っています。さらに、当センターの重要な業務として九大病院全体の病床管理があります。各診療科の病床稼働率に応じた弾力的な固有病床、共通病床の運用を実施しています。これにより平均在院日数の短縮を図る一方、病床稼働率を約90%で維持しています。毎月で当センター主催の地域医療連携をテーマにした講演会を開催し、毎回150人を超える院外からの参加者があります。講演会では院内・院外の率直な意見交換があり、ホットな討論が好評です。

地域医療連携センター組織図

- 地域医療連携センター会議（吉良センター長）
  - 前方支援部門（栗山医療連携Co）
    - 地域連携担当
    - 病床管理担当
    - 患者様相談室
  - 後方支援部門（岩谷医療連携Co）
    - 退院支援担当
    - 在宅療養支援室
    - 広報担当
  - アジア国際医療連携室（牟田副センター長）

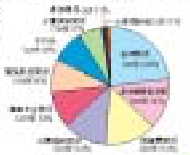
前方支援部門

医療連携コーディネーター（地域医療チーフ） 栗山幸子

地域連携担当：受診当日に直接入院される患者様に対して、即日入院患者受け入れサービスを実施しています。本サービスを受けられる患者様は、入院当日には窓口で事務手続きされることなく、直接センターへお越しいただき必要な事務手続きや身物搬送などを職員が行い病棟へご案内しています。さらに救急搬入の場合には看護師とともに受け入れの支援を行っています。このサービスは患者様・ご家族には大変好評で平成16年度には251件の即日入院患者受け入れサービスを実施しました。現在、九大病院へ直接入院される患者様の約半数はこのサービスを受けています。直接入院の場合は、地域医療連携センターへ前もって当サービスを依頼されますと、どなたでも受けることができます。また紹介患者様の受診時、入院時、退院時の報告を迅速に行っています（平成16年度は20,439件）。福岡市医師会のネットワークSoFに参加し、当ネットワークによる患者様受け入れの窓口にもなっています。

病床管理担当：昨年度より九大病院の一般病床は病床稼働率と平均在院日数を指標にし、4ヶ月ごとに各科固有の病床を増減することになりました。平成17年4月には最大で1科あたり10床程度の増減がありました。現在、共通病床を65床（内科系30床、外科系30床、小児系5床）設定し、緊急入院や各科の季節的な増減に対応しています。これらの共通病床の運用、各科固有病床の空床利用、各科固有病床数の管理等を専任の職員が担当しています。これにより病床の効率的な運用が可能になりました。

2005年4月医療制度事業内容
平成2005年
（新患医療対象1人・前月より継続6人）



患者様相談室：九大病院1階外来に患者様相談室を開設し、専門MSWを中心に様々な医療相談に対応しています。平成17年4月には244件の医療相談を実施しました。本年度は井上事務員が社会福祉士の試験に合格し、新たにMSWとして活動を始めることになっています。

後方支援部門

医療連携コーディネーター（看護師長） 岩谷友子

退院支援担当：入院中の患者様の転院先を各科でみつけるのが困難な場合、当センターで転院先を検索し紹介を行っています。現在、当センターには約600余りの各種地域医療機関がリストアップされており、転院先や往診医、訪問看護ステーション、ホームヘルパー、介護保険サービスなどの迅速な紹介にあたっています。地域医療機関との連絡調整のみならず、医療連携コーディネーターが中心となって退院に向けてのケアカンファレンスを入院中早い時期から実施し、円滑な転院、在宅療養をサポートしています。平成16年度に当センターの退院支援を受けられた患者様は477名（転院支援330名、在宅療養支援147名）にのぼりました。平成17年4月には1,079件の退院支援（面談183件、ケアカンファレンス57件、電話連絡調整837件など）を行いました。また転院後のフォローアップのため、平成16年度には39件の受け入れ先医療機関の訪問を実施し、患者様の転院に関わる問題点の追跡調査を行うとともに受け入れ病院との連携を深めています。

在宅療養支援担当：平成16年12月に設置基準認可され、小児科の患者様を対象に在宅療養指導業務を始めました。平成17年4月より看護師を増員し、対象を全科の患者様に広げました。九大病院1階外来に在宅療養支援室を設置、在宅医材は物流管理システムでの一元管理とし、3名の専任の看護師が常駐し在宅療養支援にあたっています。本年4月には81名の方への在宅療養指導を行いました。当院で高度先進医療を受けられた患者様が、地域で安心して生活できるよう真心をこめた支援を行っています。

広報担当：当センター主催の講演会の実施や当センター利用のためのパンフレットの作成を行っています。九大病院の医療機関向け広報誌や一般向け広報誌、地域医療連携センターホームページを通じた広報活動を実施しています。また福岡県下の200床以上病院の「連携室の連携」の会、福岡緩和ケアの夕べ定例会、福岡緩和ケア研究会、地域医療介護連携協議会等へ積極的に参加しています。

アジア国際医療連携室

地域医療連携センター副センター長 牟田耕一郎

牟田副センター長を室長とし、平成17年4月1日に発足しました。言葉の壁に直面されているアジア人の患者様が九大病院で安心して治療を受けることができるよう、外来通院または入院される際の支援を行っています。さらにアジア諸国との医療連携をめざして、本年度は4月5日にタイ国マヒドン大学のスーチット＋プチャロエン教授ご夫妻を迎えしリークショップを開催、4月21日には韓国釜山大学南商高教授以下25名の訪問団を受け入れ、講演会を実施しました。今夏には慶尚大学を訪問し意見交換の予定です。またKUARO（九州大学アジア総合研究センター）との共同研究によりアジア地域での医療連携を推進することになっています。

第3回地域医療連携センター講演会

平成16年度に当センター主催の講演会を4回実施しました。今年度は隔月に1回の実施をめざしています。平成17年3月16日に九大病院臨床大講堂で第3回地域医療連携センター講演会を開催しました。今回は在宅療養支援をテーマに取り上げ、岩谷看護師長（医療連携コーディネーター）が当センターの在宅療養支援室の活動を紹介、アイティーアイ在宅医療部松田猛さんが在宅医療機器業者の立場から、福岡市医師会訪問看護ステーション和の管理者万代逹子さん、理学療法士山本尚士さんが訪問看護・訪問リハビリの立場から、それぞれ講演されました。大学病院での在宅療養への取り組みにおける課題が議論されました。センター職員としても学ぶところが大きく、今後の活動に生かしたいと考えています。次回は、平成17年7月12日午後4時から8時まで臨床大講堂で摂食嚥下訓練・口腔ケアをテーマに開催予定です。どなたでも参加できます。参加ご希望の方は当センターまでお問い合わせください。

スタッフPHOTO 地域医療連携センター

後列左から：岩田（MSW）、長門（看）、武藤（事）、増田（事）、白谷（看）、菊池医師、平川（事）、塩野医師、井上（MSW）、村田医師、宮田（検）
前列左から：岩谷（MNC）、栗山（MNC）、吉良センター長、牟田副センター長、友部歯科医師
※事＝事務職員、事＝事務員、検＝検査技師

「膵移植高度先進医療の承認なる」

最新医療の紹介

臨床・腫瘍外科　腎疾患治療部　講師　杉谷　篤

2004年12月から全国で初めて、九大病院は膵移植の高度先進医療の承認を受けた。「約120万円の個人負担で膵単独移植や腎腎同時移植を受けることが出来るようになり、患者さんにとっておおきな福音といえる。」膵移植は脳死あるいは心停止のドナーから膵臓を十二指腸とともに移植して、適正なインスリン分泌によって糖代謝を正常化し、二次性合併症の進展阻止、QOLの改善、さらには延命、延命効果を期待する治療法であり、欧米では糖尿病に対する治療法のひとつとして定着している。我が国では1997年の臓器移植法施行後、本年5月末現在、全国で20例の膵移植が行われた。そのうち九大病院では7例の膵腎同時移植（SPK）と1例の腎移植後膵移植（PAK）を行い、全例社会復帰している。

膵移植対象患者の特徴

我が国の膵移植の適応は内因性インスリンが枯渇した1型糖尿病患者に限定されている。現在のネットワーク膵移植登録患者は130人にのぼり、心、肺、肝移植を待つ患者よりも多い。中央調整委員会による膵移植の適応を検討する全国一律基準によって、これまで評価がわからなかった本邦の1型糖尿病患者の実態が明らかにされてきたことは内科、外科共通の福音といえる。すでに膵移植を受けた人も含んだ、当科における待機もしくは移植患者28人の特徴をまとめると、全員が糖尿病性腎症を合併しておりSPKかPAKの適応である。平均年齢38.8歳、男女比は10人：18人で女性に多く、患者の居住地は九州・沖縄全域と遠くは静岡県、東京都在住の人もいる。1型糖尿病の発症年齢は平均14.5歳、糖尿病罹病期間は24.1年、透析導入時の年齢は平均32.1歳、糖尿病発症後17.4年で末期腎不全に陥っている。現在までの透析歴は平均6.0年であった。糖尿病の二次性合併症として全員、網膜症を経験しており、5人は片眼もしくは両眼が失明している。血糖コントロールも困難な人が多く、二次性上皮小体機能亢進が7人にみられた。1人の待機患者が自宅で突然死している。多くの1型糖尿病の患者は早期発見・早期治療で、病気と共存しながら人生を享受している。しかし、日本人の1型糖尿病で進行が速い場合、10代で発症、30代で透析導入、40代で心疾患、脳血管疾患、感染症で死亡するという経過が懸念されており、ここに挙げた患者はまさしくそのような運命を背負った人たちである。このような内科的治療が困難な1型糖尿病の人に対して、膵移植あるいは腎腎同時移植は人生の最良のときを健康人と同様な充実した日々を送り、できるだけ長生きしてもらうための、現時点ではもっとも効果的な治療法である。

本邦膵移植の特徴

20例の膵移植のドナーは、首都圏から11件、その他の地域から9件の提供があった。膵摘出は、肝膵別個であるか、あるいは肝膵en-blocで摘出するかにより、また先行する摘出臓器の種類によって摘出手技と摘出に要した時間が異なっている。性別は男性10例、女性10例で、年齢は40歳以上が12例、実年齢の平均は39.8歳であった。脳死下提供18例のうち14例の死因が脳血管障害、3例が低酸素症、1例が頭部外傷であり、2例が心停止下提供であった。昇圧剤の使用も多く、心肺蘇生の既往が4例、術中心停止が1例にみられる。臓器搬送時間は平均3時間53分、膵臓と腎臓の総虚血時間はそれぞれ10時間57分、12時間30分であったので、厚生労働省とネットワークの指針に適合するように、迅速なレシピエント選定と搬送が確保されている。我々のレシピエント手術は、原則として第2の下腹部斜切開を用いて膵臓を左腸骨窩の腹腔内に、腎臓を左腸骨窩の腹腔外に移植している。レシピエントの性別は男性7例、女性13例、平均年齢35.4歳、待機期間は平均602日であった。移植術式については、PAK 3例、SPK17例である。膵液ドレナージは10例に膀胱吻合、10例に腸管吻合が施行され、自験例を含め膀胱吻合の4例はのちに腸管吻合に変更されている。HLAは平均2.3Agマッチしていた。免疫抑制療法はTacrolimusまたはCiclosporineAにMMFとsteroidを加えた3剤を基本にし、抗体導入療法を付加した症例が18例で、特に最近の10例ではBasiliximabが使用されている。8例で拒絶反応がみられたが、いずれも治療に反応している。合併症については、グラフト膵静脈血栓症で7日目に摘出された症例が1例、1年後にグラフト十二指腸穿孔で摘出された1例、腎グラフトのATNが3例、TacrolimusまたはCiclosporineAの副作用が4例、尿路合併症で膀胱吻合を腸管吻合に変更した症例が4例であった。その後の移植腎、移植膵機能はいずれも良好で、すべてのレシピエントが社会復帰を果たしている。インスリンが離脱まで平均28.4日、Basiliximabの使用によってステロイドの早期減量が可能となっている。

膵移植の展望

欧米の膵移植と比較して本邦症例の際だった特徴は、ドナー年齢が10歳以上高齢であり、死因も脳血管障害が多く、心停止ドナー2例もふくめて、13例が"marginal donor"の範疇に入る。レシピエントの罹病期間、待機期間も欧米に比較して長く、ドナー数が少ないために待機期間はさらに延長して、悪い条件のもとで移植を実施しなくてはならない状況になっている。膵島移植は主に心停止ドナーから実験的に開始されたが、インスリン離脱に至る例はほとんどない。ドナーの数が極端に少なく移植医療は停滞しているが、膵腎移植待機患者は増えており、今後の進展が期待される。

災害対策シミュレーションの実施

行事レポート

災害救急医学　助手　溝那朝雄

当院では大災害時の初動体制を確定する目的で永田病院長の指揮の下、5月17日（火）に大地震を想定した初動対応のシミュレーションを行いました。今回の訓練は、緊急災害対策マニュアル改訂ワーキンググループ（委員長：災害救急医学橋本誠教授）が福岡県西方沖地震以前から検討課題として指摘していた人手の少ない勤務帯における初動対応を検証するために土曜日日勤帯の発災とし、各病棟・部署は事前に各々作成したアクションカードに基づいて行動し、その有用性や問題点を検討することを主目的としました。本訓練の詳細な検証会は6月上旬に予定されており、今回詳細なコメントは差し控えますが、訓練当日に参加された皆様から貴重な意見を多数いただきましたことに感謝申し上げます。

以下、シミュレーションを実際的に企画運営した立場から雑感などを述べさせていただきます。

- まずは災害時の対応に際して、いくつか留意していただきたい点を申し上げます。防災対策では、予防、準備（訓練・備蓄）、被害の軽減化という3つのツボをおさえておく必要があります。発災の際には、二次災害の防止に努めつつ、活用できるマンパワーも考慮に入れて、なすべき対応の優先順位を決定しなければなりません。場合によっては、最大多数の救命・安全確保という日頃の臨床とは正反対の観点での対応を迫られる場合があります。
- 現場スタッフが時系列的に具体的にすべき行動を書いたチェックリスト、いわゆるアクションカードの作成は、事前の備えとして、多くの方のブレインストーミングになったように思います。災害対策では、このような過程が非常に重要とされています。つまり、スタッフ各自がアクションカード作成過程、あるいはシミュレーションを通して、いろいろな問題点に気づき、対策を考えることが重要なわけです。災害対応の基本的姿勢は、まずは日頃用いているシステムの延長上で対応を考えるべきとされています。今回の訓練で指摘された問題点は、予め日頃の業務上行っているシステム（医師・看護師の連絡体制、役割分担、他の部署との連携）を少し改良するだけで対処できるものも多数あります。既に一部の問題については解決に向け、職種を越え、話し合い・連携がもたれたことで院内各部署・多職種間の相互理解が深まったものと思われます。これは当院にとって大きな収穫だと思います。

今後ともアクションカード改良あるいは平日日勤帯のアクションカード開発にご協力いただければと考えます。

「現場被害状況を記載したボードの前で今後の対応を協議する初動指揮者」

なお、福岡県西方沖地震による九州大学全体の被害額は施設企画課の調査で13億円に上ることがわかりました。九大病院は超音波測定装置など64台が破損（被害額8,000万円）したほか壁の亀裂、給水施設の破損、エレベーターの故障など7,500万円の被害がありました。新病院の南棟は免震構造があるために被害がなく、安全でした。余震もなお続いており、継続的に対策を強化していきたいと思います。

リンパ浮腫に対する実技講習会

リハビリ部　理学療法　上島隆秀

4月24日（日）午後2時半より、当院リハビリテーション部を会場として、リンパ浮腫に対する実技講習会（リンパ浮腫患者グループ「あすなろ会」主催）が行われました。遠くは広島から50名の患者、医療関係者を集めて満席となった会場では、森平文子講師による「複合的理学療法」＊の講義に引き続き、5名の講師によるセルフケアの実技指導（写真は吉川敏子講師）が行われました。リンパ浮腫の保存的治療であり、国際リンパ学会でも認められている複合的理学療法については、専門家不足の問題などから全国的にも普及していないのが現状です。当院においても複合的理学療法を施行・指導できる専門家（リンパドレナージセラピスト）はいません。しかし、複合的理学療法を実践することで、リンパ浮腫を軽減させ、患者のQOLを維持・向上させることが可能です。今回の講習会は、リンパ浮腫に悩む患者や医療関係者にとって大いに意義深いものとなりました。

＊複合的理学療法には、1：スキンケア、2：用手的リンパドレナージ、3：圧迫療法、4：圧迫下での運動療法、の4つがあります。

真奈美鍼灸整骨院リンパ浮腫治療室の吉川講師と真剣な受講者たち

九大病院経営分析室レポート

Report

患者逆紹介率が倍増

平成16年度医事統計

経営・情報担当副病院長
本田　浩

平成16年4月の国立大学法人化と同時に、九大病院の納行部も新たにスタートしました。当初は手探り状態でしたが、本田病院長はじめ全職員が一致団結し、安全で質の高い医療の提供と同時に経営の改善に取り組んでいます。紹介された患者さんに対して、最高の医療を提供し、速やかに紹介先の医療機関へお返しすることを九大病院の基本方針として鋭意努力しているところです。

患者数は、入院が対15年度実績比98.1%と下回ったものの、外来は108.6%と上回っています。

1日1人当たりの診療点数は、入院が対15年度実績比101.1%、外来が101.2%と上回っています。

紹介率は15年度の57.9%に比較し65.7%、逆紹介率は15年度の22.6%が36.1%と上昇していますが、ことに逆紹介率に関しては9月以降著増し、現在は50%前後で推移しています。病診連携への意識が全診療科で高まったことに起因するものと思います。

部門紹介

Section Introduction

歯科医療センター矯正歯科

毎週土曜日無料相談コーナー開設

平成16年11月18日19日の両日、"矯正歯科医療の新しい風～国民の健康と心豊かな生活を求めて～"をメインテーマに九州大学矯正歯科（口腔保健社会学講座）主管で第63回日本矯正歯科学会学術大会を福岡にて開催し、盛況のうちに閉幕いたしました。

学会期間中に市民の皆様を対象として、歯科矯正学、矯正歯科治療の意義を広く伝えご理解いただけるよう市民公開講座"何歳までできるの？大人の矯正治療"を企画したところ、多大なる反響がありました。開設された歯並び相談コーナーには事前のファックスとハガキによる受付で178人の応募があり、当日参加も含めると17歳から82歳の200人を超える市民の方々が相談を受けに来られました。また、会場に来られた方々のアンケートによりますと、"歯並びやかみ合わせについて気にしていますか？"との問いに対しては、総回答数152通に対して、"非常に気にしている""気にしている"を合わせるとその数は85.5%に及び、市民の歯並びに対する関心は高く、たくさんの方々が悩んでおられることを公開講座と相談コーナーを通して知ることができました。来院される患者様に対して治療を日頃担当するだけでなく、このような市民の皆様の要望や悩みにお応えすることも大学病院の役目ではないかと考えるに至り、九州大学歯科医療センター矯正歯科は平成17年6月から、毎週土曜日の病院休診日を利用して無料相談コーナーを開設することに致しました。相談には日本矯正歯科学会の指導医や認定医らが担当します。必ず予約をしておいでください。

日　時：平成17年6月4日より開始。
　　毎週土曜日午前10時から午後3時まで
場　所：九州大学病院歯科医療センター矯正歯科
内　容：歯ならびや咬み合わせの異常（不正咬合）の障害、歯科矯正治療の適切な開始時期、方法、料金などの説明や相談（治療や検査は行いません。）
住　所：〒812－8582　福岡市東区馬出3－1－1
お問い合わせ：TEL　092－642－6469
　　FAX　092－642－6268
料　金：無　料
申し込み方法：前日金曜日の午後4時までに予約を上記の電話またはFaxでお願いします。

矯正歯科　教　授：中島　昭彦
　　医局長：北原　亨

「市民公開講座歯科歯並び相談コーナーにて」

矯正治療前の歯並び

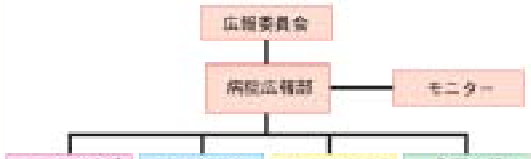
矯正治療後の歯並び

広報部

広報委員長・広報部長　吉良潤一

九大病院に広報部が誕生しました。これまでは年数回広報委員会が開催され、病院の広報の方針を決めていましたが、これでは機動性、速報性に欠けることから、平成17年4月に専任の広報担当事務員が初めておかれたことを受け、広報委員会の下に広報部を設置しました。広報部では10人の部員が毎週ミーティングを開き、迅速な編集を図ることにしました。広報部は、新たに創刊された医療機関向けの広報誌である九大病院ニュース、従来からある一般向けの九大病院だより、さらに九大病院ホームページや各診療科・部のパンフレットの作成を行っています。各診療科・部の広報担当者から定期的に寄せられるニュースを取り上げ、記事にします。また外部・内部モニターを置き、読者の皆様の声を紙面に反映させることをめざします。読者の皆様からのご意見をお待ちしています。

広報部の連絡先は、電話 092-642-5205、FAX 092-642-5008
電子メールアドレスは ihsokho@jmu.kyushu-u.ac.jp です。



前列：左から　杉本副看護部長、白谷副看護部長、吉良広報部長、吉竹副広報部長、林副問
後列：左から　衛生技術職員、薬剤部副部長、山田課長補佐

臨床検査標準化の世界と日本の動き：九州大学病院の役割

九州大学病院検査部
部長 **濱崎直孝**

臨床検査とは生体成分を分析して診断治療に役立てるものである。このような分析に必要なものは「正確性」と「精密性」である。分析された結果の測定値は再現性があり、その測定単位（dimension）が同じであれば、その数字を単純に比較検討できなければならない。分析結果に対する解説や補足を付けなければ分析結果を正確に伝えることができないようでは、それは科学的分析とは言わない。残念ながら、これまでの臨床検査分析は科学的分析とは言い難い部分があった。即ち、「臨床検査測定値はそれぞれの病院に特有なものであり、患者が転院すれば検査はやり直すのが当然で、他院の検査データを利用できない」と一般的には思われている。しかしながら、このような状況を是正する動きが、最近、国内外で急速に起こってきているので紹介する。

まず、世界的な動きとしては、重さや長さなどの計量標準と同様に生物試料分析にも標準化の動きが出てきたことである。その動きの中で重要性から臨床検査測定値の標準化がまず取り上げられ、国際度量衡委員会、国際臨床化学会、国際試験所認定機構（ILAC）、WHOが中心となって、2002年にJoint Committee on Traceability in Laboratory Medicine（JCTLM）が発足した。JCTLMは臨床検査測定項目それぞれに対応する標準物質を作成し、それを基準として「正確性」を確保しようというものである。この委員会には日本は発足当初から参画しており、九大病院検査部の康　東天助教授が日本代表として参加している。

国内における臨床検査標準化活動の中心になっているのは「福岡県五病院会」である。福岡県五病院会とは福岡県内4大学（九大、福大、久留米大、産業医大）病院検査部と飯塚病院検査部のことを指す。この五病院会と県医師会、県技師会が協力して県内ほぼ全ての病院で共通に利用できる基準範囲を設定し、初期診療に必須40項目弱の検査項目で、県内どの病院で測定してもその数値は相互に比較できる状態が10年以上に亘って完成されている。九州大学病院は他の4病院と共にこの活動の中心的役割を果たしてきている。臨床検査測定値がこのような多数の項目で人口500万人の広域で標準化されていることは世界的にも珍しく、この活動は国際臨床化学会の機関誌に掲載されている（Clin. Chem. Lab. Med. 39, 256－262 (2001)）。上述の世界的なJCTLM活動に対応するため、福岡県の実績に刺激され、平成10年には日本臨床検査標準協議会（JCCLS）の中に「臨床検査標準化基本検討委員会（委員長：濱崎直孝）」が設立され、日本の臨床検査に関係するあらゆる団体、学会が官民挙をあげて現在取り組んでいる。この活動は本年1月18日の日本経済新聞の一面で取り上げられ世間の注目を集めている。

では、なぜ、このような努力をして臨床検査の標準化をする必要があるのか。それは次に列挙するような利点があり、経験だけではない科学的な医療の基盤を形成するのに臨床検査の標準化は避けては通れない過程であるからである。

- ＊臨床検査が標準化されることで、診断・治療指針へ客観的な検査情報を提供でき、個々の患者の検査結果の評価が客観的になる。
- ＊医師の経験的医療に加えて、標準化された臨床検査値を用いた疫学解析の質が向上する。
- ＊普遍化された診断・治療指針、健康指導ガイドラインの設定が可能になる（医療の標準化）。
- ＊転院などがあっても、共通に利用できる検査データがあれば、長期にさかのぼって検査データの追跡が可能になり、患者や個人の健康管理が容易になる。医療費の削減にも繋がる。
- ＊地域での病診連携や電子カルテなどが充実する。

このような利点を考えると、臨床検査の標準化は現代医療に是非とも必要な作業であると認識できるはずであり、それ故に国内外の活動が起こってきたと考えられる。近い将来、少なくとも、日本国内では臨床検査の標準化がかなり整備されるはずであり、世界的な整備も夢ではない時代が近づいている。その中で九大病院の役割は大きい。

人人人人人……

三代目の心臓外科医になる **冨永隆治さん**

「元気のよい診療科にしたい」と言う。東北大病院と並んで昨年6月に移植関連学会合同委員会から心臓移植実施施設に認定を受け、今年2月に九州では初めて脳死した人の心臓の提供による心臓移植手術を成功させ注目された。外国まで出かけて移植手術を受けていた九州の患者さんたちにとって待望のもてる問題だった。移植手術に限らず冠動脈や弁膜の疾患、胸部や胸腹部の大動脈瘤などは患者さんが多く、手術のリスクも高いという。患者さんたちの期待に応えられるよう「人工臓器、移植再生などの医学、医療を推進する。全国に知られる診療科が願いです。」と目標は高い。さらに福岡というアジアに近い立地条件を生かし「外国の大学や研究機関などと手を結び医学、医療の研究開発を進めたい」と国際性も重視している。

科長は教授だから、九大医学部の三代目心臓外科教授である。初代の藤永皓一教授に一番目に入局した。その意図は「快気のあるさっぱりした男。連め役として特有のセンスを持っている」と評している。専門は人工臓器。アメリカ・クリーブランドクリニックに留学して胸を磨いた。二代目安井久善教授の元で助教授として手術の腕を磨いた。国立医療センターの医長から抜擢されたのは「臨床経験を買われた」と本人は謙遜しているが同門関係も「天性の手技があり、それに経験と努力を持ち合わせている」と言う。修猷館高校で剣道に励み、九大では剣道部に入り、主将として活躍して今では5段の腕前。剣道の四戒を「恐懼恐慌」とし、医療の道にもつねづね自戒の言葉としているという。また、学生時代には博多の聖福寺に寄宿しており、九大医学部に入ると仏教青年会にも入り、心の修行をしている。かつては週一回程度シナイを握ったが、今は仕事が忙しくて「剣道は息子の試合をかい間見るくらい」と言う。自宅は福岡市西区。三人の息子さんがいる。55歳。

（H）

新人リレー日記

溜藤登子新生児内科部門
姜 旻廷（カン ミンジョン）
看護師

不安と期待を抱き新生児ICUに初出勤してからもう2カ月が経ちます。ベビーの小さい体に触れることに手が震えるほどの緊張感を抱えながら看護を行っています。日々成長していくベビーのかわいい姿、面会に来られるご家族の愛情に満ちた素敵な笑顔に感動する毎日です。命の素晴らしさに触れながら自分の心の成長も感じます。これからも看護師としてやさしい心とケアをこころがけて日々努力し学ぶ姿勢を忘れず一歩一歩つ頑張っていきたいです。

薬剤部
矢野 貴久
薬剤師

4月より薬剤部で勤務しております矢野貴久です。私は薬剤師免許取得後5年間、九州大学大学院にて研究漬けの日々を送って参りましたので、調剤技術や臨床知識、患者様や医療スタッフへの対応等では、まだまだ未熟な点が多く、新たな気持ちで毎日勉強しております。薬剤師として、処方箋の向こうにいる患者様のことを常に考え、より有効で安全な医療の提供に貢献できるよう頑張りたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

検査部
櫻町 啓之
検査技師

4月1日付で大分大学病院より赴任いたしました、櫻町　啓之と申します。ちょうど20年前国立福岡中央病院に就職、その後大分大学病院に転勤し、これまで生理検査を除く全ての臨床検査に従事してきました。臨床検査技師である他に、認定輸血検査技師・細胞検査士・緊急臨床検査士・医療情報技師でもあり、「何でもできる」ことがセールスポイントです。これからも『よく学び、よく遊ぶ』をモットーに、一生懸命努力していきますので、皆様の御指導よろしくお願いいたします。

別府先進医療センター腫瘍外科
佐々木 淳
医師

本年4月より別府先進医療センター腫瘍外科に赴任いたしました。平成3年大分医科大学卒業で、前任の大分大学第一外科では肝臓外科を中心に消化器外科に従事しておりました。別府先進医療センターでも肝臓癌の治療はもとより、胆膵領手術など肝胆膵領域の治療を重点的に行っていく所存です。また、肝癌の研究もがんばって行いたいと思います。休日には学生より続けておりますサッカーや、渓流釣りにてリフレッシュをしております。今後ともよろしくお願い致します。

人事の動き

【就任】

平成18年4月1日～平成18年6月1日

	所属	就任年月日	氏名
教授	心臓外科	17. 5. 1	冨永隆治
助教授	先端医工学診療部	17. 4. 1	江上裕之
講師	外科（別府）	17. 4. 1	佐々木淳
助手	第一内科	17. 4. 1	原田英樹
	心療内科	17. 4. 1	金丸芳郎
	小児内科	17. 4. 1	宮崎隆
	泌尿器科	17. 4. 1	岡野哲治
	整形外科	17. 4. 1	竹本真生
	眼科学教室	17. 4. 1	久嶋秀昭
	産科婦人科	17. 4. 1	吉村直樹
	産科婦人科	17. 4. 1	吉村泰典
	第二内科	17. 4. 1	小林隆夫
	第一外科	17. 4. 1	浦山博人
	第二外科	17. 4. 1	森田隆
	第二外科	17. 4. 1	内山秀昭
	第二外科	17. 4. 1	山崎本郎
	第二外科	17. 4. 1	山下伸也
	皮膚科	17. 4. 1	竹内聡
	放射線科	17. 4. 1	徳永英雄
	放射線科	17. 4. 1	原豊
	歯科	17. 4. 1	久保哲朗
	放射線科	17. 4. 1	徳山良男
	救急部	17. 4. 1	青柳有彦
	救急部	17. 4. 1	安部秀俊
	救急部	17. 4. 1	金子誠哉
	病理部	17. 4. 1	山本真由
	臨床センター	17. 4. 1	安陪浩己
助手	総合診療科	17. 4. 1	塩田匡輝
	歯周病科	17. 4. 1	三浦真由美
	歯科口腔外科	17. 4. 1	平木昭夫
	歯科矯正（総合歯科内科）部門	17. 4. 1	樋口徳洋
	総合歯科	17. 5. 1	三浦智史
	総合歯科	17. 5. 1	杉森哲
	総合歯科	17. 5. 1	藤戸哲
	総合歯科	17. 5. 1	前田健人
	第一外科	17. 5. 10	上田浩久
	第一内科	17. 6. 1	竹中宏介
	第一内科	17. 6. 1	東本正樹
	第二内科	17. 6. 1	秋穂哲哉
	口腔顎顔面外科	17. 6. 1	松田隆人
臨床教授	心療内科	17. 4. 1	竹内孝一
	小児科	17. 4. 1	島袋浩平
	第二外科	17. 4. 1	江頭明典
	皮膚科	17. 4. 1	大日輝記
	泌尿器科	17. 4. 1	原野雄二郎
	眼科	17. 4. 1	益田宗孝
	放射線科	17. 4. 1	野口智弘
	外科	17. 4. 1	秦宏一郎
	総合診療部	17. 4. 10	中島一樹
	第二内科	17. 5. 1	末広寿俊
	産科婦人科	17. 5. 1	北條隆也
	東京外科	17. 5. 1	荒本明大

【退任】

	所属	退任年月日	氏名
教授	心臓外科	17. 5. 31	藤田博樹
講師	産婦人科（別府）	17. 5. 31	加藤秀明
助手	整形外科	17. 4. 30	松本喜寛
	精神科神経科	17. 4. 30	樋口輝彦
助手	第一外科	17. 5. 12	山下博文
	第二内科	17. 5. 31	八尾善臣
	第二内科	17. 5. 31	後藤公宣
	産婦人科（別府）	17. 5. 31	宮良俊雄